

## まえがき

こんにちは。北大映画研究会現部長の新田敦之と申します。この度は我々映画研究会の部誌を手にとって頂きありがとうございます。

私たち北大映画研究会は、映画の自主製作や上映を行う北海道大学公認サークルです。映画好きで、様々なジャンルを好む人間が多く集まっていて、活動で集まった際はわいわい映画について語り合う、そのような雰囲気の中で活動しています。

主な活動は、先ほど述べた通り、映画の自主製作と上映です。映画の製作では、部員が監督・脚本・撮影・編集・演技などすべてを行っています。扱う機材は先代から受け継がれてきた本格的なものばかりです。上映では、主に部室で部員の好きな映画を皆で見えています。様々な映画好きが在籍する本サークルでは、古今東西のあらゆる名作から、ディープなものまで幅広く扱っています。

私たちは、随時部員を募集しています。札幌市内の大学生で、上記の活動に興味のある方、映画が好きだという方、ぜひご連絡ください。一緒に映画について語り合いたいです。

さて、今回の部誌ですが、これは例年私たちが、新歓の一環として行っているブログリレーの本年度分記事をまとめたものです。

内容は、担当した部員が好きな映画、おすすめの映画について思う存分語るといえるものです。読んでいただければ、先述した部員の映画愛や情熱を感じていただければと思います。また、ただブログの文章をのせるだけではなく、コラムを設け、各ページの記事を担当する部員が自由に装飾を施すというように、内容とデザインともに部員が工夫を凝らしたものとなっております。映画好きならきっと楽しんでいただければと思います。

最後に、本サークルの部誌を手にとっていただいたことに再度御礼申し上げます。

北海道大学映画研究会 部長  
工学部3年 新田敦之

# TABLE OF CONTENTS

## I. INTRODUCTION

まえがき	1
目次	2

## II. FRESHMAN/SOPHOMORE (1年目~2年目)

安住 『DUNE』	3
中嶋 『ガタカ』	6
田仲 『さらば青春の光』	7
阿部 『DEAR EVAN HANSEN』	12
津田 『MISSION IMPOSSIBLE』	13
矢部 『Good will hunting』	14
鎌田 『Catch me if you can』	15
松村 『イエスマン』	16
富田 『パレードへようこそ』	17
遠藤 『シックス・センス』	20
高橋 『007』	22
コラム 映画研究会活動紹介	24

## III. JUNIOR/SENIOR/OB (3年目、4年目、OB)①

安齋 『モーレッツ! オトナ帝国』	25
萱野 『天気の子』 / 『ラ・ラ・ランド』	27
新田 『地獄の黙示録』	30
豊岡 『夢幻東京』	32
根岸 『ラストエンペラー』	33
コラム 映画研究会新作紹介	36

## IV. JUNIOR/SENIOR/OB (3年目、4年目、OB)②

古川 『レディ・イン・ザ・ウォーター』	38
香西 『次元大介の墓標』	42
上川 宮崎駿のソーラーパンク	44
金井 『aftersun』	47

## V. Conclusion

あとがき	51
------	----

## 『DUNE 砂の惑星・神話の現出』

安住

What is to give Light must endure burning.

世界を照らす者は、己の身を焼かねばならない。

— Viktor. e. Frankl

一年の安住です。

私が今回紹介する映画は、ドウニ・ヴィルヌーヴ監督、ティモシー・シャラメ主演の『DUNE 砂の惑星 part one』です。

本作は、フランク・ハーバードによる長編SF小説を原作とする前後編の大作映画であり、製作・俳優陣には今日のハリウッドの粹を集めたと呼べるような極めて豪華な布陣が敷かれています。

さらに印象的なのは、ドウニ監督の「私の人生は、この映画を撮るために存在した」という一言。

製作側のこうした尋常ならざる熱の入り方からもわかるように、いわばこの作品は、すべてのSFファンが待ち焦がれ、その動静を睨み続けてきたひととき特別な一品ということなのです。

それでは長くなりますが、まずはこの『DUNE』というコンテンツの壮大な歴史を紐解いていきたいと思います。

名作家フランク・ハーバードが1965年に出版した小説『デューン 砂の惑星』、これがすべての始まりです。

古典的な英雄叙事詩の風格と高い哲学性を持ちつつも、難解かつ精緻を極める設定に裏付けられた斬新な未来世界の姿を見事に描き出したこの作品は、当時の文芸界に大きな衝撃を与えました。ヒューゴ賞・ネビュラ賞の2大SF大賞を同時受賞する快挙につき、4冊の続編が次いで出版。SF界に燦然と屹立するあまりに壮大で重厚な作品世界は、『スター・ウォーズ』や『風の谷のナウシカ』などの有名作品に多大なる影響を与え、同作はいつしかハードSF作品の金字塔として人々の記憶に刻まれることになったのです。

さて、そんな人気作ですから、たちまちのうちに実写映画化の計画が立ち上がります。

まずは『エル・トポ』で知られるアレハンドロ・ホドロフスキー監督が製作を開始するも、挫折。(この一部始終はドキュメンタリー映画『ホドロフスキーのDUNE』に収録されています)

ついで「カルトの帝王」デイヴィッド・リンチが監督した『デューン(砂の惑星)』が公開されるも、散々な評価に終わりました。

その後ドラマ版が作られ放映されるもあまりパツとした評価を得ず、紆余曲折を経てついにドウニ監督の『DUNE 砂の惑星』にたどり着くのです。

前置きが長くなりました。

ここから先は、コンテンツの歩んできたこうした経緯を踏まえて、「原作小説の描き出した唯一無二の『世界』をスクリーン上に映し出す」という「責務」をこの映画はどのような形で果たしたか、という観点から細部を観察していきたいと思います。

まず目を引くのは、何よりもその圧倒的な映像美です。

ドゥニ監督が得意とする荘厳な風景映像と、独特な美術センスが導き出した様々な器物のデザインは、どこか奇妙ながらも美しく、眼前に広がる光景は間違いなく我々の生きる世界と地続きのものではない、と直感的に悟られます。

特に私が気に入っているのは、後述する惑星アラキス統治権の委任シーンにてアトレイデス家当主レオと相見える宇宙皇帝の大使たちが纏う装束や、搭乗する宇宙船のデザインです。

あえて言葉で表現するならば、有機的ながらも機械的、懐古的ながらも先進的、統一的ながらも個性的。相反する要素が絶妙に併存し、融合を果たしている様は極めて強烈なものです。

また、工夫された脚本と演出は、特徴的な作品世界のつくり成り立ちをある程度噛み砕いた形で表現しています。

原作小説の群像劇のスタイルを廃して作品の運びを主人公ポールの物語として一貫させた決断や、それに伴い追加された、映画オリジナルの「墓地参礼」シーンは特に見事です。

原作小説が持つ語り部の語り代わりに代わり、アトレイデス家が代々統治してきた伝統の地を去るもの悲しさと、新天地たる惑星アラキス…すなわち「デューン」の存在がより一層印象的に感じられ

る配慮といえます。

そして、先ほど少し触れた宇宙皇帝からアトレイデス家へのアラキスの統治権委任シーンは、中世世界の反芻たる狂気の政治構造をこの上なく分かりやすくかつ鮮烈に示す効果を持っています。

レオ・アトレイデスが紙(羊皮?)の誓約書に封蝋を行う場面などは、「本当にこれは西暦一万年の世界なのか?」と疑いたくなるような心地よい混乱をもたらしてきます。

そして、私が最も感激したのは、何よりもこの映画は「剣と忠誠の世界」としての遠未来を究極的に興奮を誘う形で映し出していることです。

この作品世界の戦闘員はみな、剣を携えて闘います。

人類の活動圏が全宇宙に広がり現代科学の及ばぬ超越的精神文明が構築された未来において、戦いに従事する人々は例外なく刀剣を握りしめて戦うという珍妙な状況には、ある種の倒錯した美が感じとれます。

最も原始的である意味野蛮な戦闘スタイルともいえるのに、そこには洗練された武器・防具や完成された統制のシステムといった合理的な裏付けや独自の審美性が存在し、すべてが揺らぐことのない必然として機能しています。

まさにこれは、大作映画としての娯楽性を保ちながらも、原作小説の世界観をこの上なく再現した好例といえるはずで

ここにはまだまだ書き切れない魅力がたくさんあります。(例えば、主人公ポールを演じるティモシー・シャラメほか豪華俳優陣の珠

玉の演技、バグパイプマーチなどハンス・ジマーが指揮を取る印象的な劇伴の数々、カッコよくて古風な台詞の応酬など：)

私は、映画というメディアはひとつの深遠なる作品世界をこれ以上なく効果的に描写することのできる媒体だと考えます。

監督の裁量にその世界の造形の大半が委ねられてしまうという点はもちろんあるのですが、まるで並行世界の自分たちを覗き込むように、鮮烈な実感(に近いもの)を伴ってその世界の詳細な姿そのものを「体験」することができ、という特色は映画にのみ持つことを許されたものであるように感じます。

それゆえ、この『DUNE』という作品が、私個人の考える理想の姿をまとって眼前に現れたという事実は何物にも代え難いように思われるのです。

「原作再現」という観点で色々と書いてきましたが、原作を知らなくても存分に楽しめるような自立した魅力をもこの映画は持っています。

何もかもが新鮮で圧倒的な作品です。打ち震えるような映画体験をしたい人は、ぜひご覧ください。ちなみに今年続編も公開です！



## 私の一番好きなSF映画

中嶋

一年の中嶋です。

私が紹介する映画はアンドリュー・ニコル監督の「ガタカ」です。私はSF映画ディストピア映画と生物学的テーマを取り入れたSF映画が大好きなのですが、この映画はその二つをカバーした（私にとって）数少ない理想的な作品です。（ちなみにこの監督は他にも「TIME」や「トゥルーマン・ショー」などを手掛けています。この二つもかなり面白いSF映画です。）

遺伝子操作が当たり前になった社会。信仰深い家庭で遺伝子操作を受けず、両親の期待を背負って生まれた主人公ヴィンセント。しかし、生まれた時点で行った遺伝子解析により、将来多くのハンディキャップを負うことが予測されたと産婦人科医は両親に説明します。それを聞いた両親は疲弊し、次の子には遺伝子操作を受けさせようと決めます。

両親の期待も愛情も、才能に恵まれた「適正者」である弟に注がれ、「不適正者」である主人公はもはや除け者にされています。

家族を見返し、遺伝子情報に縛られた社会から抜け出すために彼は宇宙飛行士になることを夢見ていました。そのために寝る間も惜しんで努力しますが、面接官は彼の才能に耳も課さず、遺伝子選考で落とされてしまいます。

希望を失いかけていた主人公はDNAブローカーと呼ばれるグレイな業者に最後の希望を託します。ブローカーは事故で足が動かなくなつた元水泳選手ジェロームを紹介し、彼と協力して遺伝子ごと身分を偽装する計画を提案します。（どのように偽装するかは本編を観てください！）

偽装は成功し、簡単に宇宙局「ガタカ」へ入局。努力して身につけた圧倒的なスキルと非の打ちどころのない遺伝子によつ

てついに宇宙への配属が決まりますが…。（少し長いあらすじでしたがメインストーリーはここからです。ぜひ観て楽しんでください。）

ヴィンセントとジェロームが打ち解けていくシーン、ロケットが打ち上げられる直前の遺伝子検査官の台詞など人物が出てくるシーンだけでなく、遺伝子をチェックするシステム、90年代味を残した独特な近未来感など…好きな場面は上げたらキリがないほどたくさんあります。また、SFのみならず、サスペンスや恋愛など様々な要素を兼ね備えた文学的にも視覚的にも楽しめる映画だと思います。北大の北部図書館にもあるので時間があつたら是非観てください。

# ブリテイツシュ青春ドラマ『さらば青春の光』



こんにちは、田仲と申します。一年生です。私が今回紹介するのは、1979年のイギリス映画「さらば青春の光」でございます。

## ・タイトルに関して

このタイトル、聞き覚えのある人も多いと思います。そうですね。某お笑いコンビのコンビ名です。実はあの名前の元ネタなんでしょうね。というのもどうやらコンビ結成に際して事務所の先輩が二人に、「じゃあ（コンビ名は）俺が付けたるわ。昨日見た映画が二本あるからどっちか選べ」と言ったそうで、その二つが『さらば青春の光』か『復讐するは我にあり』だったもので

すから、さすがに後者はないだろうと消去法で前者に決まった  
そうです。

### ・映画概要と背景知識

さて、そんなエピソードのあるこの映画ですが、内容はお笑  
いなのかというところとまったくそうではなく、ジャンルとしては青  
春映画、ヒューマンドラマというところになるかと思えます。

1979年のイギリス映画である本作は、英国三大ロックバン  
ドの一つに数えられるザ・フーのアルバム『四重人格』を原作  
としており、作中でもザ・フーの音楽がふんだんに使用されて  
います。映画ストーリーについては下項にて詳しく触れますの  
で、ここでは背景知識を少しだけ。この映画ではモッズとロッ  
カーズという二つのスタイルが描かれています。モッズという

のは1950年代後半から60年代にかけて若者の間で流行

したスタイルのことで、細身のイタリアンスーツの上からミリ  
タリーパーカーM-51(いわゆるモッズコートです)を着用し、  
ミラーとライトでゴテゴテにデコったベスパのスクーターに  
またがって街を荒らしたやべえ奴らのことを指します。ロッカ  
ーズというのはこれと相對する派閥であり、こちらは革ジャン  
にジーンズ、髪はリーゼント、カフェレーサーなどのオートバ  
イにまたがり夜な夜な仲間レースをふっかけて湾岸ミッド  
ナイトという、まさに不良を地で行くスタイルの連中でした。  
ロッカーズとモッズは当時バチクソに仲が悪く、たびたび衝  
突を繰り返していたそうです。本作『さらば青春の光』はまさ  
にそんな時代を舞台とし、あるモッズの少年を主人公として描





↑モッズたちが愛用していたカスタムスクーター

かれるドラマです。忠実に再現されたモッズファッションや

・ストーリー

ザ・フーの音楽なども本作を語るうえで外せない魅力ですので、視聴する際はそういった点も是非お楽しみいただければと思います。

広告会社の郵便室係である若者、ジミー・クーパーはモッズであり、週末には乱交、暴走、ドラッグ、ロッカーズとの喧嘩と華々しい不良生活を送っていた。その不良ぶりは留まること

を知らず、挙句の果てには薬局からのドラッグ窃盗や職場の無断欠勤など様々な問題行動を引き起こす。しかし彼らはそんな行動を悪びれることなく、その過激さは増す一方であった。ある祝日、クーパーらモッズたちは海沿いの街で集会を行う。

だがそこにはたまたまロッカーズたちも居合わせており、両者はついに全面衝突した。乱闘の中、次第にモッズたちは暴徒化し、暴動が巻き起こる。その最中、クーパーは思いを寄せるモッズの女性ステフと交わっており、モッズとクーパーの興奮は

この日頂点に達する。だがその後、モッズたちの熱は急速に冷

けられてしまいます。

め、平凡な日常が戻ってきてしまう。あの日の興奮が忘れられないクーパーは次第に孤立し、愛し合ったはずのステフにもあしらわれ、やがて彼の青春は儂く過ぎ去っていくのだった……。

### ・見どころ

本作の見どころはやはり卓越したセンスで描かれるリアルなモッズのライフスタイルでしょう。完璧に再現された衣装やバイクはどれも抜群にキマツており、そのカッコよさに痺れます。そして役者の見事な演技から感じ取れる、停滞気味であった当時のイギリス社会で若者たちが抱えていた行き場のない怒りは、どこか今の日本を生きる我々にも響くところがあり、それを発散するかなのような刹那的な生き方には思わず惹きつ

また私が本作で特に素晴らしいと考えるのはそのストーリーです。これは若者たちの青春を描いたものではありませんが、日本の作品でよく描かれるようなキラキラで爽やかな青春ストーリーとは全く異なるものです。モッズたちの熱狂は彼らにとっての青春ではありませんが、その光の裏には社会からの疎外という影があります。また主人公のクーパー少年はモッズとして生きるという理想世界と実際の現実世界との乖離に苦悩します。クーパーは終盤、この苦悩を乗り越えますが、それは少年時代の夢の終わりと、かつて彼が嫌っていた大人の仲間入りという何とも切なく寂しい成長なのです。その様を目にしたとき、きっと誰もが「さらば青春の光」という邦題に納得するこ

とでしよう。

是非一度ご覧いただければ幸いです。

・まとめ

本作は青春映画の金字塔と言われており、また『トレインズ  
ポツティング』などに代表されるユースカルチャー映画の原点  
とも言える作品です。この作品は大人や体制への反抗心という、  
いつの時代も若者の心の奥で燦っている思いや、さらに彼らが  
その心を捨て社会に従属していく様が巧みに描写されていま  
す。ですからこの作品には、時代を超えて全ての若者に刺さる  
ものがあると私は思います。また国こそ異なりますが、若者の  
破滅を描いているという点でこの映画はアメリカン・ニューシ  
ネマ作品ともどこか通ずる部分があると思いますので、そうい  
った作品が好きな人にもおすすすめできる映画となっています。

## 『Dear Evan Hansen』

阿部

法学部1年の阿部です。

映画は大好きですが、知識はありません。映画の楽しみ方って人それぞれでいいと思うんです。でもやっぱりかっこよく語れるようになりたいので、少しずつ勉強中です。

私がよく観るのはヒューマンドラマです。人間臭さの漂う作品に出会えると、とっても嬉しいんです。ただ、感想を言葉にするのが本当に難しいと感じます。人間の言葉が人間の心情に追いついていないんです(笑)。だからこそ映像で表現する素晴らしさがあると思います！ごめんなさい、言い訳です…。本当は私に語彙力がないだけです。拙い文章ですが、どうぞよろしく。

さて、前置きは長くなりましたが、今回私が紹介するのは『Dear Evan Hansen』というミュージカル映画です。トニー賞、グラミー賞、エミー賞などで大量受賞を重ねた名作ミュージカルを映画化したものです。『La La Land』や『The Greatest Showman』の音楽を手掛けた製作陣が携わっています。

私は、楽曲から入りました。まず、Sam Smithの『You Will Be Found』にグッと心を掴まれました。映画を観たあと、『A little closer』が一番好きな曲になりました。色々辛すぎたときに聴いては、ドバドバ泣いていたのを覚えています。どの歌も、励ます。というよりは、寄り添ってくれる、雰囲気だと私は感じました。

物語は、社交不安障害に悩まされる男子高校生が主人公です。はじめに、人を悲しませないための小さな嘘。そこから彼なりに

苦勞しながらも、少しずつ嘘を塗り重ねていきます。周りの人は、その嘘のおかげで救われていくんです。でもいつか、どこかでその平穩が崩れていってしまったら…っていう感じのお話です。きれいにまとまりすぎず、リアリティのある結末です。ネタバレが怖くて上手に説明できません…(笑)。とにかく観てください！！感情移入できること間違いなしです！

長時間悩みながら書いているのに、下手くそすぎて泣けてきたのでこちらへんで終りにします。自分に伸びしろしか感じ得ません(笑)。次に書くときには、脚本や演出にも言及できるようになってみたいです。

読んでくださりありがとうございます！



## 『ミッションインポッシブル』

津田

初めまして一年の津田です。今回僕が紹介する映画はミッションインポッシブルシリーズです。ミッションインポッシブルシリーズは1996年から2018年までに6作品にわたって世界中で愛されているスパイ映画のシリーズです。2023年7月には「ミッションインポッシブルデッドレコニング Part1」、2024年6月には「ミッションインポッシブルデッドレコニング Part2」の公開が控えており、2024年をもってシリーズが終了することが予告されています。映画シリーズとして知られているミッションインポッシブルシリーズですが、このシリーズには実はあまり知られていない歴史があります。1966年から1973年までアメリカ合衆国で放送されたドラマシリーズ「スパイ大作戦」(原題 mission impossible)を元にして映画シリーズとして新たに作ったのがトムクルーズ主演の映画シリーズだということ。僕はこのシリーズが好き過ぎるあまりドラマシリーズ「スパイ大作戦」もシーズン3くらいまで見ました。映画がドラマを元にしていてといっても内容はオリジナルです。ドラマ内に出てくるスパイ組織名やハイテク装置などが映画にも出てくるというように設定が同じといった感じ。ドラマシリーズを見たことがある人だとよりいっそう楽しめる要素がちりばめられています。ドラマシリーズも見てみることもおすすめ。一大体のあらすじはアメリカのスパイ組織「C.I.A」に所属するイーサンハント(トムクルーズ)が困難だと思えるような国家に関わるミッションを仲間と共にコンプリートするといった感じです。結末はいつも見え見えですが、内容は結構複雑です。裏切り裏切られなどするので内容についていくのに頭を使い、かなりハ

ラハラします。そういった点では予想がつかず、さすがはスパイ映画の最高峰だなど思います。そしてなんといつてもリアルなアクションシーン。ブルジュハリファにへばり付いたり、飛行機にへばり付いたりとかとへばり付きがちなトム。6作品目に当たる「ミッションインポッシブルフォールアウト」では、ビルの上からビルの屋上へと飛び移るシーンの撮影の際にトムは実際に足を骨折しました。僕はもうなんだかトムが心配になってきました。そんなミッションインポッシブルですが、すべての作品が面白いというわけではありません。特に「作品目と」作品目は全く面白くありません。「作品目はドラマシリーズを見たことがない人は全く理解できないですし、見たことがある人も「なんそれ」と思ってしまうはず。作品目はイーサンハントのキャラクターが変。作品目から割と面白くなっていきます。シリーズ内で最も面白い作品はやはり「作品目に当たる「ミッション・インポッシブルログネーション」です。これは面白い。脚本監督はクリストファーマツカリーです。この作品でトムクルーズに気に入られたクリストファーは最近やたらとトムの作品に使われるようになっていきます。クリストファーはその後の作品目にあたる「ミッションインポッシブルフォールアウト」の脚本・監督を務め、あのトップガンマーベリックの脚本も手がけています。作品目の脚本・監督もクリストファーです。好きな監督の一人です。ここで僕はこのシリーズにおける作品ランキングを勝手に書いておくのでぜひ参考に見てみてください。そして、皆さん「」を映画館に何度も見にいって興行収入をぶち上げましょう。

## 真の友人とは…？『グットウイルハンティング』

矢部

一年の矢部です。

私が紹介する映画は

マッド・デイモン主演、マッド・デイモン、ベン・アフレック  
脚本のグッドウイルハンティング 旅立ちです。

マッドデイモン演じる主人公ウイルは、傷害事件の保護観察中に、ミコノ清掃員として働いている。ある日、フィールズ賞受賞者の教授ランボーは数学の講義で、解くのに数年要した難問を生徒に出題する。だが、すぐに、その難問を解いた人物が現れた。生徒の中で、解けたと名乗り出るものはいない。解いたのは、清掃員のウイルであった。天才的な才能をもつウイルであるが、幼少期、孤児であったため、深い心の傷を抱えており、幸せになることを恐れている。教授は、ウイルと共同研究しようとするが、ウイルは次第に教授の教えを聞かなくなっていく。ウイルの素行不良を直すために、ランボーは友人であったロビンウイルリアムズ演じる精神分析医のショーンの治療を受けさせることにする。

ウイルはショーンに対して、はじめは冷たい態度をとっていたが、ショーンや、ハーバード大生の恋人スカイラーと関わるうちに、少しずつ心を開き、自分の人生と向き合うことを決める。

好きなシーンは、ウイルの裁判での自己弁護のシーン。

ショーンとウイルがベンチに座って話すシーン。親友のベン・

アフレック演じるチャッキーが、ウイルの家に迎えにくるが、というシーン。真の友とは、何かを考えさせられます。

ハーバード大在学中から構想を始めたマッドデイモンが、ベン・アフレックと共に共同で脚本を書いた、名作です。何度見ても、心揺さぶられる役者たちの演技とストーリー。



## 『キヤッチ・ミー・イフ・ユー・キャン』

鎌田

はじめまして、一年の鎌田です。今回私が紹介する映画は、レオナルド・ディカプリオ主演『キヤッチ・ミー・イフ・ユー・キャン (2002)』です。

高校生のフランク・M・アバグネイルは尊敬する父が母と離婚すると聞き、ショックで衝動的に家を飛び出してしまふ。彼は、生活のため偽造小切手の詐欺を始めるようになる。最初はなかなかうまくいかなかったが、大手航空会社のパイロットに成りますますと誰もがものごとくに騙された。更に偽の小切手を繰り返して発行し巨額の資金を得ることになる。一方、巨額小切手偽造詐欺事件を捜査していたFBI捜査官カール・ハンラティは、徐々に犯人に迫っていく。

この映画はフランク・M・アバグネイルが主人公の話であるが、彼は実在する人物であり、この映画で描かれる物語はほとんど全てが事実です。また、この映画では銀行詐欺、パイロット、教員助手、医師、弁護士の4人に扮して人々を騙していく姿が描かれています。実際には実在したフランク・M・アバグネイルが実際に行った身分詐称の回数の方が多いと言われています。

実話とは思えない展開が続き、次は何に扮して人を騙すのか考察するのが面白いと同時に、彼の逃亡追跡はとても興味深いで

す。また、実在する彼はわずか19歳から22歳までの間に、詐欺で約600万ドルを稼ぎ出しており、世界8カ国で詐欺を行ったと言われています。巧みに人を騙すフランク・アバグネイルが実在することを知った上で、映画『キヤッチ・ミー・イフ・ユー・キャン』を観るとさらにこの映画を楽しめると思います。



## 『イエスマン』

松村

一年の松村です。今回僕が紹介するのは「イエスマン」。“YES”は人生のパスワード”です。

僕は凄くネガティブな性格で、よく人生関係なので悩みます。

そんな時は、『前向きになれる映画』と検索して、映画を探します。中学生の時に、検索したら出てきたのでイエスマンを見てみました。この映画は、ネガティブ思考で何事にもノーと言いつつ、周りの人が離れていき人生の上手くいっていない主人公が、あるセミナーに参加し、どんなことにもイエスと答えなければいけなくなり、退屈だった人生がどんどん変わっていくという映画です。

この映画を見て、僕は何事も考え次第だからポジティブに生きた方が楽しいし、無駄なことなんて何も無いのだなと思いました。





## 「プライドを持って。人生は短いんだ」『パレードへようこそ』

とみた

一年目のとみたです。

私が紹介するのは、2014年のイギリスの映画『パレードへようこそ』(Pride)です。

監督はトニー賞受賞の演出家マシュー・ウォーチャスが務め、この映画でも80年代のナンバーに合わせた演出が観客を魅了させます。

実在の団体「Lesbians and Gays Support Miners (炭鉱夫支援同性愛者の会) (以下LGSM)」の活動をもとにした映画です。

炭鉱労働者を支援したLGSMのリーダーをベン・シュネッツァーが演じ、グループのメンバーをアンドリュー・スコット、『はじまりへの旅』(Captain Fantastic)、『1917 命をかけた伝令』(1917)のジョージ・マッケイが演じている。また、ウェールズの人々を演じるのは『ラブ・アクチュアリー』(Love Actually)、『生きろ LIVING』(Living)のビル・ナイ、『ハリー・ポッター』(Harry Potter)シリーズのイメelda・スタウトン。

私のバイブルになっている映画です。

### 【ストーリー】

映画の舞台は1984年のイギリス。サッチャー政権下で起きた炭鉱ストライキのニュース映像から始まります。

炭鉱労働者たちのストライキに心を動かされたゲイ活動家のマーク・アシュトン(ベン・シュネッツァー)が、仲間と共に炭鉱労働者とその家族を支援するために募金活動(LGSM)を始めます。しかし、寄付の申し出はことごとく無視されます。彼らがゲイだからというだけで。炭鉱組合にとって彼らは別世界の住人でしかなかったからです。

そこに勘違いが元で唯一受け入れてくれる炭鉱が現れ、寄付金のお礼にウェールズの炭鉱町へと向かいます。拒絶されながらも寄り添って、共に窮地を抜け出そうとするヒューマンドラマです。

### 【背景】

この時代のイギリスの炭鉱はたびたび題材にされ、『リトルダンサー』(Billy Elliot)や『ブラス！』(Brassed Off)などがあります。

鉄の女と呼ばれたサッチャーが分断を煽り広げていた80年代のイギリスでは、ゲイの権利を求めるデモが活発に行われていました。そこに廃坑を命じられ、職を失った炭坑労働者のストライキが重なります。

映画には次の会話があります。

カトリックの家で育ったジョー・クーパー（ジョージ・マツケイ）は、ゲイであることをずっと隠していた。20歳の誕生日にゲイ・パレード・イン・ロンドンに無理やり参加させられるが、ゲイの仲間によく出会えたところでの会話。

「僕まだゲイの人と会ったことなくて」

「マジで？」

「今日誕生日なんだ」

「何歳になったの」

「20歳」

「あなた犯罪者よ、結婚は16、ゲイは21から。知らなかったの？」

当時のイギリスは、性的同意年齢は異性間では16歳なのにに対し、同性間は21歳となっていました。デモの主な主張の一つにこれがあります。同性愛者への差別はひどく、デモをすれば「病気だ」「気狂いだ」と暴言を吐かれ、集会をするとうるさいと投げられる。今では同性婚が認められていますがかつて同性愛は犯罪で極刑を課された人もいました。

炭坑労働者たちによるストライキは、籠城作戦でインフラが止められたり警官との衝突もある過酷なものでした。マークは炭鉱労働者が虐げられる現状は、自分たち同性愛者のものと同じだと訴えます。

「彼らの敵はサッチャー、警察も敵だ。僕らと同じさ、差別主義者の敵がいけないだけで」「僕らと一緒にだ。警官とタブロイド氏と政府にいじめられてる」

この境遇の重なりが交わることのなかった二つの立場の間を出会わせ、共闘という驚きの結果を生んだのです。

### 【私の好きな場面】

最後に私の好きな場面を少し紹介して終わろうと思います。

ウエールズの人たちとLGMのメンバーが打ち解けた後に歓談する場面。お互いのことに興味を示す会話。

ウエールズの主婦「二人が夫婦なのは分かるの。でも教えて欲しいの」

ゲイカップル「あのこと？」

ウエールズの主婦「家事はどっちがやるの？」

てつきり「あのこと」を聞かれたかと思ったゲイカップルのあつげに取られた顔と、真剣な主婦の顔が面白いです。

サンドイッチを四角に切るクリフ（ビル・ナイ）と三角にきるヘフィーナ（イメルダ・スタウトン）の会話の場面。

クリフ「私はゲイだ」

ヘフィーナ「知ってた。少し前に気づいたの」

クリフ「ゲイが村に来てから？」

ヘフィーナ「私の場合は1968年から」

生まれてからずっと村にいる幼馴染の二人の会話。二人の絆が垣間見え微笑ましくなります。ビル・ナイの笑顔が素敵な場面。

そしてなんとといってもラストシーンです！！

「プライドを持って。人生は短いんだ」

マークの台詞がこの映画の全てを語っていると思います。ゲイの権利を求めるパレードで幕を開けた物語。出会いと共

闘を経て過ぎた1年後、その季節が再度やってきます。パレードへようこそ——。



## 「忘れられないラスト」『シックス・センス』

遠藤

初めまして、映画部2年の遠藤といいます。

私がおすすめる映画は「シックス・センス」です。

公開は1999年10月、監督はM・ナイト・シヤマラン監督です。まず、簡単にあらすじを紹介します。ブルース・ウィリス演じる精神科医のマルコムは、かつて自分が担当していた患者に「自分を救ってくれなかった」という思いから拳銃で撃たれ、自室で倒れてしまいます。マルコムはリハビリを重ね、その一年後コール・シアーという少年と出会います。コールは死者が見えてしまう「第6感」を持っていました。しかしそのことを母親や学校の生徒、教師からは全く理解してもらえず、ひたすら脅える日々を送っていました。マルコムはコールの姿をかつて自分が救えなかった患者と重ね、コールをなんとかして救いたいと力になるうとするが…という話です。

この映画は最後の展開が非常に衝撃的で、大ヒットになったと言われています。

1999年の映画の興行収入について調べてみると、日本国内で4位になっていました。

(ちなみに1位は「アルマゲドン」、2位は「スターウォーズ I ファントム・メナス」でした)

ジャンルはホラー・ミステリーなのでけっこう怖いシーンが多いです。

画質も全体的に薄暗く黒がよく目立っていて、終始不穏というか不気味な感じが伝わってきました。こう、じわじわくる怖さって感じで、演出が印象的でした。(夜中に見ると、怖いかも…。)

最近公開された映画を見ると、画質が本当に綺麗だな、鮮やかだなど思うことが多いです。有名な映画だとデジタルリマスター版が作られたりもしています。

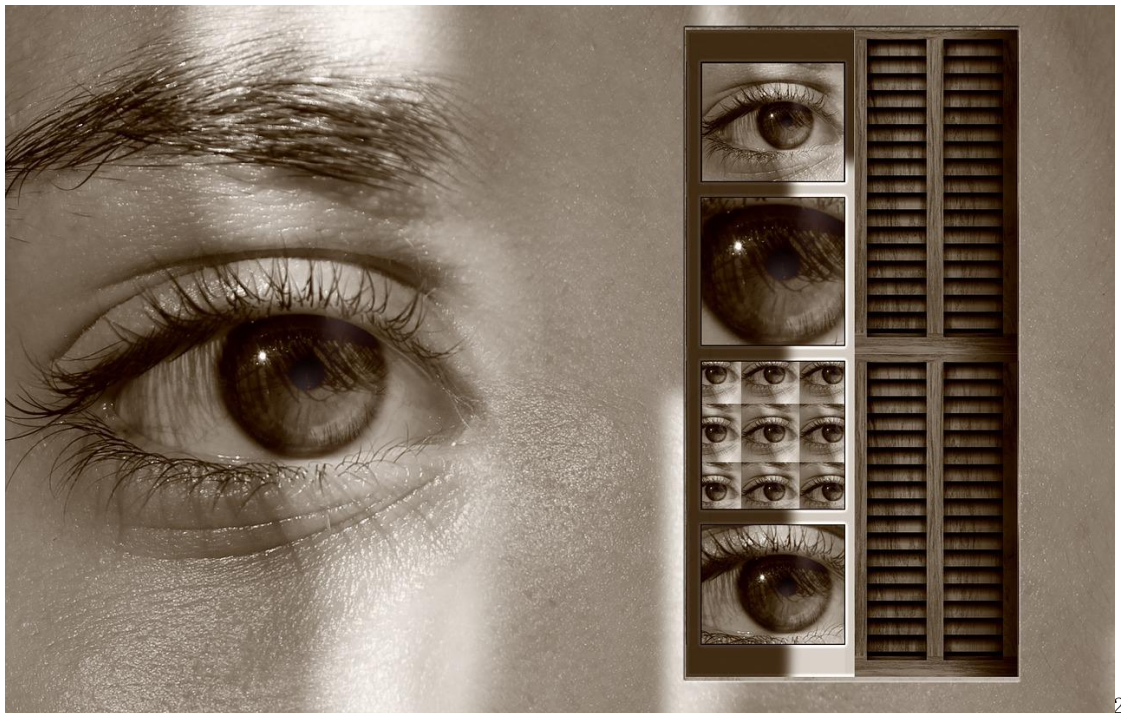
でも、この映画に限ったことではないですが、古い映画の画質が持っている雰囲気や粗さもいなくなると改めて思えました。( ; )

前に述べたようにこの映画はミステリーでもあって、最後のどんでん返しでよく知られています。私はどんでん返しがある、ということにはわかっていながら見たのですが、非常に驚いて鳥肌が立ちました。あまり詳しいことは書くことネタバレになってしまうので書けないですが、とにかく何の情報もないで見た方が良い映画だと思いました。もう一回よく見てみると、とても緻密に伏線が張られていることがわかって非常に面白かったです。

後半はヒューマンドラマの要素が強く、感動する場面も多かったです。

ホラーが苦手でない方には、ぜひ見てもらいたい映画だかなと思います。

映画部にはいろいろな部員がいるので、あんまり気負わずぜひ見学に来てください。読んでいただきありがとうございます！



## 『007 カジノロワイヤル』

高橋

こんにちは。二年の高橋です。

今回僕が紹介する映画は、007シリーズから、マーティン・キヤンベル監督、ダニエル・クレイグ、エヴァ・グリーンら主演の「カジノ・ロワイヤル」です。

シリーズの「目」となる本作は、主演、ダニエル・クレイグがの代目ジェームズ・ボンドを演じた最初の作品となっており、これまでの007シリーズの伝統を受け継ぎつつも、ストーリー自体は独立したものになっています。

後の「作」にわたる“クレイグ・ボンド”シリーズの起点となる作品なので、「007映画に興味があるけど、どれを見たら良いか分からない！」という方にオススメです。（もちろん過去の007作品も最高です。特にロジャー・ムーア主演とか…）

物語は、M16の諜報員であるジェームズ・ボンドが任務に成功し、「殺しのライセンス」を与えられ、「007」に昇格する場面から始まります。晴れて007になったボンドは、テロ組織への糸口を掴むため、マダガスカルへ飛び、爆弾密造人であるモロカを捕らえますが、射殺してしまいます。

残された彼の携帯から「エリプシス」というメッセージを発見し、ボンドはその送信者を追跡するため、バハマ・ナッソーに飛びます。現地ホテルの防犯カメラの映像や、M16の部長である「パソコン」に侵入することによって、メッセーjの送信者がデイトリオスという武器商人であることが分かります。ボンドはデイトリオスを手掛かりに、他のテロリストや、一連の事件の黒幕を突き止め、犯罪資金を強奪するために奔走する…というのが主なストーリーの流れです。

ダニエル・クレイグが演じるジェームズ・ボンドはこれまでの作品とは一転して、ユーモアを排したシリアスな人物として描かれています。

敵に追い詰められても、常に余裕な表情でスパイアイテムを駆使し、窮地を脱するのではなく、時には肉体的、精神的に追い詰められて悩みながらも任務を遂行していくボンドの姿にはとてもリアリティーがあるように感じます。007映画でおなじみのヒロイン「ボンドガール」との関係も過去作のような“ありきたり”なものではなく、より複雑で考えさせられるものになっていると僕は思います。

本作に限らず007映画では、映画に登場する車や電化製品、衣類、アクセサリなどが、どの企業やブランドのものなのかはつきりわかるように映すという傾向があります。例えば、

SONYのスマホやVAIOのパソコン、オメガの時計、アストンマーティンの車など、どれもその業界の一流品。

これによって、映画によりリアリティーを与えられるうえに、企業側は一種のサブリミナル効果を期待できます。映画に登場する様々な「もの」に注目するとより楽しめることでしょう！（僕の夢は、オメガ・シーマスター・007エディションを買うことです（笑））

「カジノ・ロワイヤル」ぜひご覧ください！



## 映画を撮ろう！

北大映画研究会の主な活動内容は大きく分けて二つ。一、映画を見ること。二、映画を作ること。ここでは私たちがどのように映画を作っているのかをご紹介します。

### プロット

撮るための話が無ければお話になりません。まずは大まかなストーリーからプロットを作ります。

### 脚本

さらに具体的に登場人物の台詞や行動を描写し、脚本を完成させます。

### 絵コンテ

どんな映像をどんな順番で映すのかを絵で描いた、映画の設計図。



### キャスト集め

部員から募ることもあれば、外部の人に頼んで出演してもらうことも。

### 稽古

役者が決まれば、演技指導やすり合わせをして撮影に備えます。

### ロケハン

ロケ地の使用交渉をし、ロケハンを行うことでイメージを固めます。



### 撮影

いよいよ撮影です！

監督…全体の指示、映像のチェックなど。

撮影…カメラマン。映研には高性能一眼があります！

音声…ガンマイクで台詞や効果音を収録。

### 編集

映像と音声をつなぎ、明るさなどを補正し、仕上げて完成させます



完成した映画は上映して皆で見ます。

YouTube チャンネルにおいても公開中！

→ [youtube.com/@hucinema](https://youtube.com/@hucinema)

普段の活動の様子を Twitter にて発信中！

映研への参加も年中受付中！

→ [twitter.com/hucinema](https://twitter.com/hucinema)

完成！



## 『大人帝国からの便り』

安齋

「最後に全力で走ったのはいつですか？」

「そういえば、最近走ってないな……」

はじめまして、工学部3年安齋です。今回私からは、「劇場版クレヨンしんちゃん、モーレッツ！大人帝国の逆襲」を紹介したいと思います。

2001年に初公開されたこちらの作品、ただの子供向け映画と侮ってはいけません。子供が楽しめるのももちろんですが、むしろ大人を泣かせる作品として一時期有名になった程の作品だからです。実際当時の映画館では、物語が終盤に向かうにつれ、そこかしこから大人のすすり泣く声が聞こえてきたとかなんとか……。それほどまでに強いメッセージ性を持つこの作品、今回は特に「走る」というワードに注目してみましよう。

では、あらずじです。ある日しんのすけ達が住む春日部市に20世紀博がやってきます。そこには父ひろしや母みさえにとって懐かしい、70年代をテーマにした展示がズラリ。そんな万博に大人は夢中になり、子供そっこのけで楽しんでしまう。さらに状況はエスカレートしていき、いつしか大人達は子供に戻ったかのような振る舞いを見せ始め、ついには自分の子供を見捨てて「20世紀博」へと姿を消してしまう……。しんのすけ達は大人を、「21世紀」を取り戻せるのか!?

この物語では、現在に疲れ過去の中に立ち止まる大人と、未来へ向かう子供の対比がポイントとなります。それを如実に表すものとして、私は敵役のケンが発した次のセリフに焦点を当てました。

これはケンの企みを阻止するため走る野原一家を見ながら、彼が呟いたセリフです。ケンは劇中では現在に失望し、世界を過去へ戻すことを望むキャラクターとして描かれます。過去に埋もれ、進むのをやめてしまった彼にとつて、未来を生きたらめ走る野原一家は疎ましくも羨ましいものだったのでしょうか。

では、さらにセリフ中の「走る」という言葉に注目してみます。「走る」とは、息を切らし全力で前へ進むこと。そのように考えると、この言葉が重要な意味を帯びているように感じられます。つまり、立ち止まった大人に対しての、未来を求める姿勢を「走る」という言葉で表現しているのではないかと私は思うのです。

劇中では四六時中走っているしんのすけですが、中でも物語の最終盤、21世紀を取り戻すためテレビ塔を駆け上がるシーンは最も特徴的です。このシーンでは走るキャラを横からではなく正面から見る構図を用い、まるで逃げる視聴者自身をしんのすけが追いかけてくるような映像になっています。しんのすけを置いていかんばかりの速度で動く視点、それに追い付こうと必死に走る彼は既にポロポロです。それでも決して走ることはやめません。きっとそこには希望に溢れる未来があるはずだから……。「走る」というワードに注目するとそんな作品からのメッセージが浮かんでくるようです。

私はまだ20年と少ししか生きていませんが、それでも人生とは難しいものだと感じます。嫌なことが続けば素晴らしかった過去にすぎり、立ち止まることもあるかもしれせん。もちろんそれらも必要で重要なことです。しかしながら、走ることを忘れてはいけない。例えカッコ悪くても走り続けたしんのすけが教えてくれたように思います。

今の私はこのように感じましたが、この映画はどの登場人物に注目するか、自分が何歳のときに見るかでも大きく意味が変わり得る作品です。まだ見たことがない方はもちろん、視聴済みの方も是非もう一度見てみて下さい。きつと今のあなたにだけ届くメッセージがあることでしょう。



## 『天気の子』という映画

萱野

皆さま、おはこんばんちわ。北大映画研究会の萱野です。私が今回紹介する映画は「天気の子」です。説明しなくてもわかる人も多いと思うんですが、一応概要だけ。

『天気の子』（てんきのこ、英: Weathering With You）は、新海誠が監督・脚本を務める、2019年の日本のアニメーション映画。  
(Wikipediaより)

昨年公開されて話題になった「すずめの戸締り」の前作にあたる新海誠監督の作品です。「今から晴れるよ！」に聞き覚えのある方も多いのではないのでしょうか。さて、この映画なのですが、よく比較されるのが、前作「君の名は」と次回作「すずめの戸締り」です。これらはいずれも、新海誠監督が、自身の作風を大衆向けに「魔改造」して生み出した作品であり、どれも男女を主人公とした「世界モノ」という点で共通しているものがあります。そんな三作の中から、今回私が天気の子を選んだ理由、それは天気の子のもったメッセージが、他の二作と比較しても特異なものだからです。

(以下ネタバレ注意)

天気の子のラストで、主人公の帆高は東京を水没させる代わりにヒロインの陽菜を人柱から解放する選択をします。この、ヒロインを助けて世界を救わないという「世界モノ」としてはアンバランスな選択が天気の子のキモとなっています。私の尊敬する岡田斗司夫先生は、このラストに対して、「そんなことでは世界はダメにならない」という新海誠監督のメッセージだと解釈しておられました。私は少し異なる解釈をしてみたいと思います。

劇中で、「東京は昔海だった」と語られるシーンがあり、最後、水没した東京に帰ってきた帆高の目には、水没したなりに適応して生きていく人々の姿が映ります。そして、帆高には「世界がこうなったのは、お前のせいじゃない」という言葉がかかります。しかし、ラストシーンで陽菜と再開した帆高は、やはり自分たちこそが世界を変えたのだと確信します。どうして帆高は、世界の変革の責任を自ら背負うような考えに至ったのでしょうか？

私は、それは帆高が、自分の持つ「愛」の力を確信したからだと考えます。陽菜への確かな「愛」。その力の大きさを表現するものとして、世界は変化したのだと帆高は確信したのではないのでしょうか。



つまり、天気の子は周りを巻き込み、とんでもないスケールに拡大した帆高の恋路を描いた作品だと思おうのです。これと対極にあるのが、同じく新海誠監督の「秒速のセンチメートル」です。こちらの映画でも男の主人公の壮絶な恋愛感情が描かれますが、ラストは、何も変わらない世界でひっそりと生きていくという落ち着いたものとなっています。

「秒速のセンチメートル」から15年の時を経て、新海誠監督の中で変化した「愛の力」への認識が、世界の変革という形で現れているのが、天気の子の興味深いところではないでしょうか。

## 『ラ・ラ・ランド』という映画

萱野

皆さま、おはこんばんちわ。北大映画研究会の萱野です。僕が今回紹介する映画は「ラ・ラ・ランド」です。ミュージカル映画として有名な作品ですね。本編を観たことはなくても、オープニングの映像を見たことはある方は多いかもしれません。

あらずじ…大都会ロサンゼルス。夢を叶えようと奮闘する男女が出会い、急速に互いの距離を縮めていく。恋愛成就か、夢の大成か、切ない運命が二人を待っていた。(Netflixより)

「夢」をテーマにしたハリウッド映画というだけあって、本物の「アメリカンドリーム」がリアリティをもって描かれます。映画全編を通して、色々な形で「叶っていく夢」「叶わない夢」「形を変えていく夢」が描かれます。

人生を生きていくといつか誰もが直面する夢との向き合い方を、人の主人公の視点で再び考えさせてくれる映画ですね。そして、あらずじにもあるように、この映画は「夢」と「恋愛」の二軸で構成されています。この二つは、どちらも人生の中に、「幸福」と「後悔」を残していきます。そうして人生に残されていく「あのときの『もしも』」を思い浮かべるとき、僕たちの心には一人ひとりの物語が浮かんでいるのではないのでしょうか。



この映画を観終わったとき、きっと皆さんの心には、美しくも切ない、叶わなかったいくつもの「もしも」と、誰もが抱える「物語」が浮かんでいることでしょう。

音楽にしろ、映画にしろ、ある作品を楽しむことができるかどうかは、個人の趣味や感覚にゆだねられており、各人の好きなきょうに付き合えばよいという人は多いだろう。

私もそのような考えを持つ一人だ。しかし、一方で普遍的な輝きを持つ誰もが認める名作がある。そうでなければ、そもそも名作や名盤という概念はない。そして、この情報化社会で、各人が自分の好きなコンテンツを自由に消費できるようになったにもかかわらず、いまだに多くの人間が認める名作は存在する。むしろそれらはアクセスが容易になった分、以前より多くの人間に支持され、より強く輝いているようにさえ見える。こうした名作というものは、いったいどうして生まれるのか、何がそれらを名作にしているのだろうか。

なぜ、このようなことを考えるのかというと、私の最も愛する映画「地獄の黙示録」について書こうとあれこれ思案しているうちに、ふとこのような疑問が湧いてきたからである。地獄の黙示録は、ベトナム戦争を題材にした映画である。あらずじを簡単に示す。陸軍大尉の主人公がある日極秘任務を受ける。それは、戦争の狂気に取りつかれ、ジャングルの奥地でカルトを築くカーツ大佐を抹殺することだった。

主人公は哨戒艇に乗り込み、ともに戦場をめぐるには心もとないクルーと、カーツを目指す。道中の狂気の場面に遭遇しつつ、資料から垣間見えるカーツの精神性に触れるにつれ、徐々に戦争への疑念とカーツへのシンパシーを抱くようになる。これが大筋である。

この映画で私が何よりも印象に残っているのが映像である。過剰とさえ思えるほど極端に作り出される光と影のコントラストと色使いはこの映画の大きな特徴だろう。この映画は全体的に黄色がかった色調で統一されている。そして、重要な

シンや大きな転換点では、ここぞとばかりにより陰影は濃くわかれ、紫や黄色の毒々しい色やそれを反映させるスモクが出てくる。これにより、ほかの戦争映画とは一線を画す異様な雰囲気醸し出している。また、俳優の演技も素晴らしい。物語が進むにつれだんだんおかしくなる一行や、各地で出くわす癖の強い面々は、迫真の演技を見せてくれている。もし大味で雑な演技であれば、先述した映像もただやってみただけのチープでお粗末なものに感じられてしまうだろう。そうではなく、むしろ意識の外に追いやられてしまうほど、キャラクターと彼らの織り成すドラマがメインになっている。そして、緩急だ。この映画では戦闘はもちろん、まさしく狂気的な出来事が連続する。しかし、そのような急展開の間には登場人物の思考や関係性の変化が分かる描写がきちんと差し込まれている。それらもぬかりなく丁寧に描いてくれているので、戦争の狂気にさらされ、登場人物が狂っていく様をじっくりと味わうことができる。

このほかにも、様々な印象的な点や評価できる点が存在する。音楽やプロット、テーマ性等々である。

こうして素晴らしい点を挙げていくと、改めて名作であるように感じられる。しかし、ふと、これらが地獄の黙示録を名作にしているのだろうかという疑問が浮かぶ。

そもそも、この映画は荒削りな部分も多々見受けられる。あのシーンは非常に力を入れて撮影したのが分かるが、一方でその場の思い付きで撮ったようにしか見えないシーンも多々存在する。行き当たりばったりの中で撮れた印象的なシーンをつなぎ合わせただけにも見える。(実際、撮影は相当難航したようだ。監督夫人の製作した当時を振り返るドキュメンタリーがあるので、興味ある方はぜひ)

では、そうした粗い部分がほかの名作とは異なる雰囲気を作っているのかと言われると、断言できない気もしてしまう。

むしろ丁寧に作り込まれている部分もあることが原因ではないか。先述した私の感じる素晴らしい点は、調和しているようでもあり、ごちゃ混ぜになっているようでもある。全編ある雰囲気で貫かれているようでもあれば、全く異なる映画のシーンが繋がっているようでもある。ラストに至る主要人物の心理的な動きも、違和感はないし共感さえするが、いまいまいちわからない。このように得体の知れない怪作である。しかし、それがこの映画の魅力ではないか。

そう、今まで私が挙げた数々の長所を総和しても、本当に地獄の黙示録という映画を名作であることは説明できない。だが、これこそが名作に共通する部分ではないか。名作とは底知れぬ魅力をもち、故に見るたびに新たな発見がある作品のように思う。だからこそ、世代を超えて多くの人間を引き付けるのではないか。

この意味では、やはり地獄の黙示録は名作である。これを読み少しでも興味を持っていただけたらぜひ見ていただきたい。理解する、しないは本質的に重要ではなく、何かそれまでの人生では思いもよらなかった発見があるかどうかが重要である。そして、地獄の黙示録でそのような体験がきつとできると信じている。



## 今は亡き東京『夢幻東京』

私が紹介する映画は「東京幻夢」（実相寺昭雄、1986年）です。ある写真屋に現れた昔風の女、その姿に魅せられたカメラマンの男は、その女に魅せられ後を追うが……：  
といった、内容です。説明するのは難しいので観ていただきたいです。

さて、ここから考察です。女は昔の東京（明治、大正期）を象徴しており、カメラマンは昔の東京に憧れを持ち、それを追うものを象徴しているように思います。

理由はいくつかあります。まず、冒頭、昔の東京の映像をbgvとして流しながら人形を塗る男、それとは対比になるような近代的な建物の描写があります。そして、男が住んでいるところや、好んで写真撮影する多くの場所は昔の風情を感じる東京の景色です。映像の中では、近代的建築物と古風な建築物の対比は随所に見られます。

。女の幻影を見かける場所は常に古い館や紙芝居など、昔風の場所であり、女は常に和服を着ています。また、象徴的に挿入される柱時計や、最後のお地藏さんもまさしく「無常」を演出しています。

男には、老婆が男が追う若い女に見える、写真にそのように映ったのはまさしく、その老婆が明治、大正期の東京を生きたからでしょう。追い求めていた女の老婆となり、変わり果てた姿、すなわち追い求めていた昔の東京の現代の変わり果てた姿を見てください、時は戻せないのだと認識し、男は挫折、絶望したのでしょうか。それが最後の爆発であるように思います。実相寺監督の東京へのイメージが凝縮されていますね。

以上のようなことを台詞を使わず、音楽（クロイツェル・ソナタ）と、美しい映像で魅せる実相寺監督の感性は素晴らしいですね。





## 皇帝を「降りない」覚悟

## 『ラストエンペラー』の溥儀

根岸建人

副部長、根岸です。『ラストエンペラー』という映画について書いていきたいと思えます。

### ・『ラストエンペラー』の概要

『ラストエンペラー』は1988年にベルナルド・ベルトルッチ監督によって作られた映画です。

題材となるのは、弱冠歳で即位した中国清王朝最後の皇帝、愛新覚羅溥儀（あいしんかぐらふぎ）の一生。幼くして祀り上げられ、第二次世界大戦の中で国内外の激動に巻き込まれた溥儀の生き様が、ベルトルッチ監督の手によって、明確な一つの軸を持って描き出されていきます。

劇奏を担当するのは、最近亡くなられて『怪物』でも話題となった坂本龍一氏。カメラが中国の歴史ある風景を写し取る時、バックに流れる坂本氏の荘厳な音楽が見る人の情緒をかき立てます。

### ・「かわいそうな」溥儀のイメージは本当か？

僕は、この映画を「悲しい映画なのだろう」と想定して見始めました。

「きつと、溥儀はこの映画において、歴史の都合によって皇帝という生き方しかできなかつた、悲劇の主人公として描かれるのだろう…」

僕は初め、そう考えていました。

時代に揉まれ、それ故に権威として振る舞わねばならず、大日本帝国の傀儡となる自国・中国を眺める事しかできない「かわいそうな人物」、溥儀。

高校の時、歴史の教科書を読むことによって培われたそういったイメージが、『ラストエンペラー』を見る前の僕にはありました。

しかし、そのイメージは映画の中で時代が進んでいくにつれて、鮮やかに塗り替えられていくこととなりました。

### ・『ラストエンペラー』で描かれる溥儀、その成長

物語は、溥儀が10歳のころ、戴冠の儀式を行う（行わされる）シーンから始まります。自分が皇帝になったことを理解せず、城内を気の向くままに歩き回る溥儀を配下がたしなめるシーンには、国の長が変わった瞬間とはとても思えない、異様な雰囲気だけがただよっています。

そこから、溥儀の成長をカメラは追っていくこととなります。少年になり、兄弟と無邪気に遊ぶ溥儀。

思春期を経て、自らの地位に疑問を持つ溥儀。

一人の青年として、「国」を背負って立たなければならなくなつた溥儀。

それぞれの姿が、ゆつくりと、刻銘に映し出されていきます。溥儀は、自身の実存が「中国王朝の皇帝である」ということと、分かちがたく結びついていることを、だんだんと意識していきます。しかし、溥儀が自身の存在を意識していく姿には、僕の想像とは違った溥儀の姿がありました。

繰り返しますが、僕ははじめ溥儀が「傾国の皇帝」「歴史の被害者」といった、極端なマイナスイメージを持った人物として描かれることを想像していません。



しかし、『ラストエンペラー』の溥儀は違う。溥儀は確かに、自身が皇帝であるということについて皮肉めいた発言をしたり、なぜこのような権威を自分が持たなければならぬのかという疑問を他の人物にぶつけたりします。

しかしそれは、僕がイメージをしたような強いマイナスイメージによってとらえられるものではありませんでした。

作中、たしかに溥儀は皇帝である自身の存在を疑問に思い、時には否定します。

しかし、溥儀は皇帝であるということを絶対に「降りない」。

そこには、肩書とは違った、生きる指針としての「皇帝」としての誇り、あるいは皇帝であることしかできないというある種の諦念、その両端がないまぜとなった微妙な感情を見て取ることができます。

必ずしも、『ラストエンペラー』において、溥儀は悲劇の人物として描かれていないのです。

#### ・虚しさを伝播させる溥儀

作中で物語が進み、映画も佳境に差し掛かると、時代は第二次世界大戦に進んでいきます。溥儀の皇帝を「下りない」態度はますます強くなっていき、ここにおいて、「ラストエンペラー」としての溥儀の姿がだんだんと醸成されていくこととなります。溥儀の屹然とした態度は、もはや終盤になってくると異様です。溥儀の姿はもはや、一人の人間とは違った描き方をされています。

起こった出来事に対して淡々と、自らが皇帝として列強から期待される行動を成していく。

溥儀の心境や内面が分かりやすく示されたり、誰かに深く吐露されることは、終盤ほとんどなくなっていきます。

葛藤する、個人的な存在としての溥儀は消えていき、代わりに皇帝として存在する別の溥儀が台頭していきます。

溥儀は冷静です。内乱で、共和国軍が溥儀を連行したときも、関東軍の勅旨を通す時も、妻に逃げられた時も。時代の、歴史的な事件の中心にいなながらも、溥儀は冷静な態度を崩しません。むしろ、溥儀を取り巻く人々の方が、喜びやいきどおり、悲しみを表出します。

溥儀を取り巻く人物は、自身が持つ役割の大きさに耐えかねて歴史の舞台から逃げ出すか、フェードアウトしていきます。溥儀の元から人が消えていく瞬間、その人たちは感情を吐き出していきます。

皇后、溥儀の教師、満州国群、思想統制を受けていた人物の心情が、劇中かわるがわる吐露されていきます。それはまるで、皇帝として生きるために溥儀の人生から振り払われていった感情が、溥儀の周りの人々によって媒介されているかのようです。私が『ラストエンペラー』の中で印象深いシーンがあります。それは、「日本の天皇と溥儀（満州国の皇帝）は対等であり、満州国は決して日本の植民地ではない」という主張を、溥儀が日本の要人に向けて行うシーンです。

溥儀はここで権威を通じないということを理解したうえで、皇帝の権威を見せつける、形式的な宣言を行わなければなりません。当然、日本の要人は聞く耳を持たず、溥儀の声は宙に消えていきます。「溥儀はこうしたつらさを、一生その身に引き受け続けることを自分に強いているのか？」そのシーンの虚しさ、哀しさは僕の心に強く残りました。

### ・最後まで皇帝を降りなかつた溥儀

終盤、「最後の皇帝が住んでいた場所」として観光地化された城に訪れる溥儀。

溥儀はそこで、城の守衛の子どもに向かつて、自身が皇帝であったことをなんのわだかまりもなく伝えます。そこに迷いはありません。

ただ、自分は皇帝であるという事実を受け入れ、生きた人間として、溥儀はそこにいました。

### ・まとめ

以上、『ラストエンペラー』という映画について書いてきました。

個人として、思い悩む主体としての溥儀から、皇帝という運命を背負い、時代の渦中にながらも淡々と自分の役割を遂行する溥儀へ。

映画の物語が進むにつれて、溥儀のイメージが更新されていく感覚がとても面白い映画でした。坂本龍一のメインテーマもクセになります、ぜひ見てみてください。

つか  
監督：楢崎竜成  
主演：新田敦之

たまごをひろって  
あつためたら  
なにかうまれそう



# 映画研究会新作紹介

## アリオス

アリオス、それは  
2つの心を  
宿すものの名前

孤独な日々を悩む映人は、ある日「もう一人の自分」から、不思議な言葉を告げられる。マッチングアプリで出会った女性、優芽と夢の世界に引き込まれる映人。次々と移り変わる夢の中で、もう一人の自分と対峙し、「本当の自分」を見つけていく…

コメント:二重人格といえば、アリオスかキュリオスだよね~と言って通じる人はどれくらいいるんでしょうか…?

キャスト:萱野 祥弥、田中 美羽、根岸 建人

脚本:萱野 祥弥

監督:豊岡 芳理



北大四年で映研も四年目の古川と申します。後輩から部誌を出したいという話をもらい、もう引退した四年生としてのプレッシャーを感じながら頑張つてつらつらと書いてみました。本小論では『ナイト・シヤマラン監督の『レディ・イン・ザ・ウオーター』について、その特殊な成り立ちと表現技法を取り上げながら、メタ性を顕在化させることがどのような効果を生んでいるか検討します。

一般的にはあまり評価されていないどころかこき下ろされることがほとんどの本作ですが、2006年のカイエ・デュ・シネマ（フランスの有名な映画批評紙）ベストテンに『ディパーテッド』（マーティン・スコセッシ監督）や『父親たちの星条旗』（クリント・イーストウッド監督）を抑えて六位にランクインしたことで有名です。以下の文章は、そんな本作を自分なりに擁護してみようと書き始めたものになります。作品を視聴している前提の文章であり、ネタバレや観ていない人には訳のわからない部分があると思われるので、もし可能であれば先にご覧いただいた上でご一読いただければと思います。部誌の一記事にしては長くなつてしまいましたが、少しの間お付き合いください。

『ナイト・シヤマラン監督は、『シックス・センス』や『アンブレイカブル』のような高く評価される作品で有名な一方、『エアベンダー』や『アフター・アース』のような、鳴かず飛ばずの映画を作ってしまう監督でもある。今回はその中でも評判の良くない方の作品、『レディ・イン・ザ・ウオ-

ター』について、脚本に捉われない視点から改めて批評してみたいと思う。

そもそも『レディ・イン・ザ・ウオーター』は、大手映画サイトで軒並み低評価(映画.com 2.4/5、Flickmarks 2.9/5、IMDb 5.5/10・Metascore36 2022/5/7時点)という、なんとも微妙な映画である。確かに脚本を追う見方をすればあまり面白くない映画かもしれないが、実際レベルの高いことをやっているのではないか、というところからこの文章を始めた。この映画を理解するにあたって、映画というメディアそれ自体への前提知識が必要なように思うので、まずそれについて簡単に説明しておこう。

映画に限らず、小説や劇といった芸術作品は、「私が見て、あなたが見られる」というような、上位者である観客と下位者である作品の上下関係が成立しており、そもそもメタ的である。そのメタ性は我々観客が「これは映画だから云々」ということを考えないように、普段は覆い隠されている。例えば『ジュラシック・パーク』で恐竜が登場人物を襲う一方カメラマンはスルーすることに違和感が無いのは、それが現実をそのまま映したドキュメンタリー作品ではないことを観客は意識せずとも分かっており、他方監督もそう見せようとしているからである。古典的ハリウッド映画が醸成してきた一つの鉄則は、主観者たるカメラに対して、その被写体たちは常に受動状態に置かれ、カメラを認識すること、も、主体者たる観客を認識することもないということであった。そして古典的ハリウッド映画が想定してきた理想的観客

も、映画のメタ性が隠されていることを知ってか知らずか、そのことをはつきりと認識せずに映画を楽しむ事のできる存在である。一方で、ハリウッドはそのスタジオシステムをとくに失っており、古典的ハリウッド映画が維持してきた様々な鉄則はもはや「古典的」なものとしてしばしば虐げられてしまう。誤解を恐れずに言えば、現代においてはそのため、メタ性を顕在化させることを厭わない作品も違和感なく受容される。そのアプローチは多様にあり、『デッドプール』のように主人公が観客に語りかけることで映画内現実から映画外現実への干渉を目指すものや、『ウォンテッド』のラストのように主人公がカメラを見据えることで「見る私と見られるあなた」という関係を倒錯させるもの等が挙げられる。



以上を踏まえた上で、『レディ・イン・ザ・ウォーター』ではどのようなことが行われているだろうか。この映画はそもそも、主人公であるヒーブの管理するマンションに人魚が現れ、それを保護するところからはじまる。この出来事と、中国人老婆の語る御伽話の関連に気がついたヒーブは、御伽話に従って行動する事で人魚を元の世界に返してやろうとする。この御伽話の内容は、大勢が映画冒頭のナレーションによって明かされており、またその仔細も主人公の行動を規定する形でその都度老婆の口から語られる。よってこの映画においては、御伽話がどのように展開していくかというサスペンスは意図的に排除されている（もちろん人魚が元の世界に帰れるか、また御伽話どおりに映画が展開できるか、という点においてサスペンスがないわけではないのだが）。加えて、主人公が御伽話を再現しようとするという事は、脚本は御伽話そのままになるわけで、以上二つの理由からこの映画は「脚本を楽しむ」という視聴態度を全く受け付けない。ここ

から一般的評価が芳しくないことは十分理解できるし、これから説明することも脚本的理解による低評価を贖う事はできないのだが、しかしやはりこの映画を埋もれされておくには惜しいように思われてならず、別の側面からの評価を試みたい。

映画がメタ的である事が普段は覆い隠されているというのは先程述べたが、この映画は冒頭からメタ性が顕にされる。主人公のヒーブという名前が発話されるとき同時に女性のお尻が映されるのだが、これは Heep と Hip の類似による言葉遊びである。この事は、カメラが主観的視点である事を明示し、観客の上位性とカメラの向こうの対象の受動性を明らかにする。しつこいようだが、映画はそもそもメタ的で、映画のカメラはそもそも主観的で、カメラに映される対象は常に（意図的に何かしない限り）受動的である。ただその事を意識するかどうかは監督の匙加減と、観客の映画の経験や視聴態度などにかかっている。ここでは、そのメタ性が誰の目にもわかるようにカメラが配置されているという事を言いたいのである。映画のメタ性を明示するこの部分は重要な意味を持っているが、しかし観客がカメラの向こうに対して上位的で確固たる地位を得たように見えるのは、思いこみであることが後々明らかにされる。

他方映画終盤において、御伽話から現れた怪物（スクラント）に相対したファーバーが自身を映画の登場人物として仮構し

「（ホラー映画であれば）これはまさしく怪物や猛獣が嫌われ者を殺すシーンだ。だがこれ以前に汚い言葉や裸や殺人がない家族向け映画なら別だ。嫌われ者はこの場を生き延びる。そして心を入れ替えて再登場するんだ。ユーモラスなシーンまであったりしてね。ここで私は逃げる。君は飛びかか

る。私はドアを閉める。タッチの差でセーフというわけだ。」  
(日本語字幕より)

とカメラを直視しながら発言する。結局彼は殺されるのだが、ここで具象されているのは、メタ的人物から非メタ的人物への移行、あるいはストーリーに外部的な考察を加える者がストーリーに取り込まれてしまうということである。そもそもファアーバーは、映画の初めに新たな住人としてマンションに参入し、ヒープから多様な住人たちを紹介されることで、観客と同化して映画内世界の状況説明を受ける人物ではなかったか。そのような人物(映画の最初に導入される者、ストーリーに外部的な考察を加える者＝観客)がストーリーに取り込まれてしまうということは、この映画における主観的立場は誰によって回収されるのだろうか。

ここで、一番の英雄的立場に立たされる人物はビックであり、そして監督≡・ナイト・シヤマランその人であったことを思い出さねばならない。彼は、映画の登場人物としてありながら、文字通り自分の将来や、いつ死ぬかを知っている稀有(自分の行く末を知っている者は、時の経過に従っていかに展開していくかに腐心する映画というメディアにはおよそ適さない)な人物である。そしてそのような機能が、観客と同化しうるファアーバーではなく、この映画内世界の創造主たる監督が演じるキャラクターにこそ委ねられることは二重の意味を持つ。すなわち、この映画における真の主観的立場は観客ではなく監督にあるということ、そしてそれを映画内に明示することを監督が意図していたという事実である。



では、『レディ・イン・ザ・ウォーター』において上記のような描写がなされるのは何故だろうか。それは、この映画が

映画内寓話を映画内現実として結実させることによって成立する、構造的にメタ性を内包した映画だからである。『レディ・イン・ザ・ウォーター』が特殊なのは、普通の映画が「観客↓映画内現実」という一枚の関係性で成り立ち、映画内現実が観客の現実には干渉することは無いのに対し、「観客↓映画内現実↑映画内寓話」という二重の関係性に則っており、その映画内寓話がメタ的な壁を突破して映画内現実として観客に供されるというプロセスを踏むことで、帰納的に映画内現実が観客の現実にも逆行するような錯覚を与えるところにある。このことは、『レディ・イン・ザ・ウォーター』の根幹に位置する主題であり、観客にこれを認識してもらわないとこの映画の面白さはいまいち伝わらない。だから、*Feed* と言いながら *Feed* が映されたり、不自然なまでにメタ的な発言をする人物が観客と同化した上で御伽話に取り込まれたり、監督が自作自演したりすることで、観客の映画に対する上位性と、なおかつそれが絶対不可侵なものではなく崩壊しうることを理解してもらおうとしているのである。

ファアーバーの言う通り、*There is no originality left in the world.* *でもね。もうおかげ、the world、は我々のいる現実「世界」にもはや獨創性などは存在しないというだけでなく、この映画内「世界」が何ら獨創的なものではないというファアーバーの(そしてこの映画を酷評した多くの一般観客の)独断をも含意している。だがこう言っただけのた人物は映画内現実から映画外現実への移行に失敗し、映画内寓話に取り込まれてしまった。この映画の獨創的なところはメタ性、つまり観客の上位性を顕在化させながら、なおかつそれが絶対的なものではないということを経験の自作自演で示してしまうところにある。そして残念ながら、一般的评价を見る限りこのシヤマランの試みがうまく伝わることはなかった。しかしその破られるメタ性という表現は、恐竜に襲われ*



ることではないと安心しきっている観客にぐっと距離を詰める斬新なもので、脚本がつまらないという理由で切り捨てられるべき作品ではないはずである（そもそもその「非独創的」脚本は観客をサスペンスから引き剥がす疑似餌でしかなく、『レディ・イン・ザ・ウォーター』において何ら本質的なものではない）。

個人的に好きなブライス・ダラス・ハワードが出演していることから興味を持った作品ですが、あまりの評価の低さに納得がいかず、ここまで長々と書いてみました。願わくば、読んだ人の映画理解の一助になれば幸いです。

北大映画研究会には、こんな感じでジリジリと映画について考える部員もいるし、映画を撮りたい部員もいるし、あるいは映画はそんなに好きじゃなくてもアニメや音楽等他のサブカルが好きな部員もいます。北大生に限らず、他大から参加することも可能ですので、気軽にTwitterやgmailまでご連絡ください。ここまで読んでくださってありがとうございます。



## 次元大介の墓標

香西

こんにちは、工学部三年の香西です。私のページでは、「LUPIN THE THIRD 次元大介の墓標」という映画を紹介したいと思っています。

ルパン三世の映画というと、シリーズ劇場版一作目の「ルパン 対複製人間」や宮崎駿監督の「カリオストロの城」を思い浮かべる人が多いかと思います。この心作は、金曜ロードショーでの放映回数もとても多く、わざわざ語るまでもなくご存じの方が多いのではないのでしょうか。そこで、今回は、ルパン三世の映画の中でも、次元大介の墓標という映画を紹介させていただこうと思います。

この映画は、前年に名探偵コナンとのコラボ映画がありました。が、ルパン三世シリーズの映画として18年ぶりの新作映画であり、劇場版スピノフシリーズ「LUPIN THE THIRD」の第一作目に位置する作品です。このシリーズでは、ルパン三世シリーズに登場する、次元大介や石川五右衛門、峰不二子それぞれに焦点を当てた中編映画が製作されています。以下、軽く映画の内容に触れます。

この映画では、ルパンと次元が若くまだ仲間というよりはビジネスパートナーに近い関係だったころの話が描かれています。舞台となる東ドリアに潜入したルパンと次元は、狙っていた宝石「リトルコメット」を盗むことに成功しますが、その後の逃走中に何者かに狙撃をされてしまいます。狙撃したのは、「ヤエル奥崎」という標的とした人物の墓を用意してから仕事をする殺し屋でし

た。標的とされ墓を作られた次元はガンマンとしてヤエル奥崎に勝負を挑む…といった話になっています。

今作の見どころは登場人物たちのスタイリッシュな大人のかっこよさです。ルパンや次元はハードボイルドという言葉のイメージそのものであり、アダルトなかつこよさに満ちています。テレビシリーズやテレビスピシャルよりは原作漫画の雰囲気近く、一步大人なルパン三世を楽しむことができます。スーツをピシッと着こなすキャラ達や帽子からのぞく次元の目、セリフ回し、カーチェイス：男なら懂れてしまうようなシーンが満載です。

オーソドックスなルパン三世の話の流れ（「お宝を盗む」↓「敵があらわれる」↓「敵との対決」）の中で、タイトルにもあるように「次元大介」がメインで活躍する話になっています。作中で、銃の扱いやすさから軽く、口径の小さい銃を使用していたヤエルから、重たいコンバットマグナムを使用している次元は、早撃ちをするのにそんな重たい銃では不利だと言われてしまいます。これに対して、次元は早撃ち対決をコンバットマグナムで制したうえで、「ロマンに欠ける」と一蹴します。自分の流儀を、実力をもって語るところが次元大介という男の魅力の一つだと思います。



↑次元大介の愛銃 S&W M19(コンバットマグナム)

似たような意味の言葉を繰り返してしまいました。本作を見ていただければこう言いたくなる気持ちも伝わると思います。ルパン三世の話は基本一話完結型になっており、前作を見ていないと、続編を見てもわからないというようなことはなく、今作から見ても楽しめる作りになっています。上映時間51分の中編映画です。ので、気楽な気持ちでご覧ください。

## 宮崎駿のソーラーパンク——ジャンル批評から環境批評へ——

上川 伶

近年注目されるようになったSFの萌芽的なサブジャンルの一つに、ソーラーパンク(solarpunk)がある。太陽を語源とするソーラーは、エコシステム、自然環境、エネルギー、持続可能性といった明るい未来を想起するような諸概念を包括的に象徴している。一九六〇年代から七〇年代にかけてアメリカを中心に世界的に広がったカウンターカルチャーが生んだロック音楽に端を発するパンクには、もともと「青二才、クズ、不良」といった意味があり、広義には「反体制／反権力、ポスト資本主義、脱植民地主義」的なものを指す。SFにおけるパンクは、これに加えて、その後の十年間で一気に展開するコンピュータネットワークがもたらしたサイバネティクスの要素を取り入れたサイバーパンクというサブジャンルから始まる。サイバーパンクはその後さまざまな派生サブジャンルを生み、これらは今日なお発展途上にあるといえよう。ソーラーパンク作品が批評の俎上に載せられるとき、それは分類上サイバーパンクの系譜に連なるSFとして迎えられ、その観点から評価されることになる<sup>2)</sup>。しかし、それでは科学あるいは超科学的な発想などの思弁的な要素が構築する世界観やビジュアルの出来不出来を論じる印象批評、もしくはアール・ヌーヴォーにインスピレーションを得たソーラーパンクの美学を体現できているかをただ確認するだけの狭隘な分析にとどまってしまう。

ところで、映画や文学のジャンルとしてのSFはしばしばファンタジーと同一のカテゴリーに置かれる。ダルコ・スーヴィンは作品世界に

において物理法則を肯定するか否か、あるいは時間的な多次元性を有するかどうかによつてSFとファンタジーを分けたが<sup>3)</sup>、両者の垣根を越えた思弁的な作品群はいずれかに分類されるのをためらうかのように、その境界をますます曖昧なものにしている。永遠不変で安定的なジャンルのカテゴリーは存在せず、誰もが納得できるようなジャンル間の明瞭な区別もない。むしろジャンルそのものが可変的かつ流動的であり、分類は常に変化の過程と共にある。ジャンル論につきまとう困難さは、こうした分類という方法論自体が内在的に抱える問題から生じている。

ここで、ソーラーパンクが扱うテーマに立ち戻ってみよう。エコシステム、自然環境、エネルギー、持続可能性——これらは二〇世紀以降、イギリスやアメリカで発展してきたエコクリティシズムあるいは環境批評が取り組んできた課題だ。実際、ソーラーパンクと環境批評には、①創作Ⅱ運動と批評Ⅱ研究が同時並行で進んでいること、②構築主義的なアプローチを取らないこと、③人間中心主義(人間例外主義)を批判していることなど、いくつかの関連性が認められる。つまり、ソーラーパンクはSFであるとともに、環境批評とも密接につながっているのだ。ここにおいて、ソーラーパンク作品にはSFというジャンルを超えた批評の可能性が開かれる。



二一世紀のソーラーパンクの登場に先んじて、すでにいくつかの作品を世に出していた慧眼の持ち主が宮崎駿である。一九八四年公開の『風の谷のナウシカ』以降、『天空の城ラピュタ』（一九八六年）、『となりのトトロ』（一九八八年）、『もののけ姫』（一九九七年）と、自然環境と人間を主題とする映画を次々と世に送り出してきた。

『風の谷のナウシカ』で描かれる産業文明を滅ぼした「火の七日間」戦争から千年後のポスト・アポカリプス的な世界は、決してSFの舞台設定としての楽観的なユートピアでもなければ破滅的なディストピアでもない。マスクを装着しないと五分で肺が冒されるという腐海の毒は、水俣湾に垂れ流されたメチル水銀あるいはそれにより発生した水俣病のシンボルにほかならない。しかし、腐海の底にたどり着き、「青き清浄の地」の存在を知ったナウシカは、腐海が世界の浄化装置であることに気づく。

『天空の城ラピュタ』前半に登場する廃坑前夜の鉱山町はスチームパンクの世界観そのものだが、後半のタイガーモス号から空中都市ラピュタまでの展開はソーラーパンクのモチーフが満載である。いみじくも、ソーラーパンクという語を広めるきっかけとなった記事「スチームパンクからソーラーパンクへ」<sup>1</sup>が提起した両者の対比をすでに映像化していたのだ。ただし、この作品もまた単なるファンタジスティックな冒険譚とするにはあまりにも設定が詳細に作りこまれすぎている。また、主人公たちは財宝に執着せず、滅びの呪文を唱え、最終的に要塞としての機能を失って真の楽園と化したラピュタから脱出する道を選ぶ。ラピュタが誰の手にも渡らないという結末は、自

然環境と人間の共存という二都合主義を退けている。

宮崎駿作品に見られるエコジカルなアイデアを掘り下げてみると、SFやファンタジーを対象にしたジャンル批評が見逃してきたリアリズムの視点が見出せる。宮崎駿のソーラ・パンクは、環境批評の文脈での再評価が必要であろう。

<sup>1</sup> SFは従来、サイエンス・フィクション(Science Fiction)の略称として用いられてきたが、必ずしも科学を題材とするものにとどまらず、さまざまな道具立てによって現実と異なる世界観を提示するものであることから、スペキュレイティヴ・フィクション(Speculative Fiction)という語が使われることもある。また、藤子・F・不二雄はSFを「すかし・ふしぎ」な物語と表現した。

<sup>2</sup> 例えば Progresca. (2021, August 7). *Solarpunk 2077: Reimagining the future through green-tinted lenses*. Medium. <https://progresca.medium.com/solarpunk-2077-reimagining-the-future-through-green-tinted-lenses-5a5febedbd4d>

<sup>3</sup> ダルコ・スーヴィン』SFの変容』大橋洋一訳、国文社、一九九一年

<sup>4</sup> *From steampunk to solarpunk*. Republic of the Bees. (2008, August 7). <https://republicofthebees.wordpress.com/2008/05/27/from-steampunk-to-solarpunk/>

ビデオの中のあなたと、  
-----『aftersun』  
についての覚書

去る2月に大学を卒業した。専攻した映画研究では卒論で完全に打ちのめされ、批評を離れて映画作家としてのさらなる研鑽を積むべく札幌を離れて東京に移った私に、久々に映画について書く機会が舞い込んだ。思ってもみない出来事に浮き足立ち、題材は何にしようか、先々に足繁く通ったシヤンタル・アケルマン映画祭のことでも書いてみようか、などと逡巡していた5月末のある日、ものすごい映画に出会ってしまった。

5月26日に本邦公開となった映画『aftersun』である。

前評判も良く、ほどよい期待とともに映画館の椅子に腰掛けた私を、この映画は震えるような衝撃と感動でもって迎えてくれた。映画が進むにつれて私は泣きたいような叫び出したくなるような衝動に駆られ、服の裾を掴みながらスクリーンに釘付けとなり、エンドロールが流れ始めた時には感情の遣り場に困り果てて頭を抱えてしまった。憧憬と喪失と昂揚感と愛おしさが混ざり合ったような夢のような心地で劇場を後にし、とんでもないものを見てしまったのだと愕然とするほどであった。

映画は父と娘の、トルコでのひと夏のヴァカンスを題材としている。冒頭、ホテルの一室で娘が父を撮影している荒いビデオカメラの映像が映し出され、ほどなくして場面は時制のはっきりしないレイヴ・パーティーの断片的な映像へと変わる。ストロボのように明滅を繰り返す画面。パーティーには大人の女性、おそらく現在の成長した娘ソフィと、踊っている父の姿がある。映画はやがて父とのヴァカンスの日々を描写し始める。それは

いつまでも踊っている

回想であり、成長したソフィの記憶なのだということを観客は  
知る。  
かないりようすけ

ふたりの海辺のヴァカンスの日々は、通常の映画に見られるような透明なカメラと、父が持参したビデオカメラによる映像の両者が入り混じる形で描かれる。時折回想は寸断され、レイヴの場面が差し挟まれることで、ソフィとともに観客はいつとき記憶の再生から醒め、またすぐに回想へ戻っていく。

つい目を惹くのはビデオカメラの荒いルックの映像だが、そこらについてはあとで触れるとしよう。通常の映画叙述としてのカットもまた素晴らしく構成されている。ひとつひとつの画角、例えばクロス・アップでは通常必要な人物のサイズよりもう一步寄って、ロング・ショットではもう一步引いて撮られている印象がある。それらは人物や事物といった画面内のモティーフを類的なものとしてみなす記号性から引き剥がし、そのもの自体の質感や手触りを刻印する役割を果たしているようだ。フレーム内の構成において、モティーフを中心に据えてほかを背景とするような撮り方でなく、全体のコンポジションを優先して配置し、そこにたまたまモティーフが映り込んだかのようなさりげなさを演出しているのもそれに寄与している(父がホテルの一室でひとり太極拳をしている場面での人物配置などはこれにあたる)。カメラの運動も秀逸だ。ごくゆっくりとしたパンやティルト、ドリー移動と浅いフォーカスの変化によって瞑想的な耽美性を現出させ、客観的な事実の羅列としての視線でなく内心の記憶を辿るソフィの主観的なまなざしを観客に共有さ

せている。こうした撮影面の工夫と前述した場面の交替によって、モノローグや説明的な要素を排していてもなお観客は眼前の出来事が過去のものであることを体感によって了解できる。映像のもつ現在性とこの過去の感覚が共存する映像は、記憶と呼ぶにふさわしい質感を備えている。過去から現在にわたる、娘の父との関係性の豊かさと複雑さが映画の主題をなしている。



劇中ではふたりの会話から窺い知れる範囲以上のことについて説明されることは一切なく、観客はふたりのやりとりから状況を補完して理解していく。ソフィの父と母は離婚しているようだ。今、娘は母と住んでいて、父とは普段会っていない。父はおそらく金銭的に余裕がないようだ。映画が進むにつれて、父がどうやら内心に何かを抱えているらしいことも推察されるようになってくる。父がホテルでひとり泣いている。夜の街を駆け回る。故郷には帰らないと漏らす。二歳の誕生日の思い出を娘に問われて、ビデオカメラを止めさせてから暗い声色でぼつぼつと語る。記憶の中では決定的なことにはなにも語られないが、それらの場面がもたらす静かな不穏さと、現在のソフィがこの夏を、おそらくは大切な記憶として思い返しているということが観客にある認識へと連れていく。娘は、このあと父には一度も会っていないのではないか。これが二人の最後の夏なのではないだろうか。そのことを父はわかっていたのではないか。もしかすると、父はすでに……。

ソフィの視線をなぞり、映画が描くヴァカンスの日々を記憶として追いかける中で、親子の微笑ましいやりとりに隠れた複雑な心理が浮かび上がってくる。まだ二歳のソフィは無邪気に普段会えない父との日々を楽しんでいる。その姿を大人になったソフィとともに観客は懐かしく見つめる。父は娘の言動のひとつひとつを柔らかく受け止め、笑いかけ、時にふざけ合いながら、子を気に掛ける優しい親として振る舞っている。子供のソフィに気づかない彼の心の機微が、大人になったソフィと観客には伝わってくる。父も完璧な人間ではなかったということ。普段会えない娘と会うことの嬉しさと同時に、彼女の日常に自分がいけないさみしさ、夏が終われば自分のもとからまた離れていくつらさもあつたであろうこと。どんどん成長する娘に伝えられることの少なさ、それでも父として何かを残したいという



焦り、当時のソフィには知り得なかった感情が父の表情や背中から痛烈に感じられる。親子は近いようでいて、親子であるがゆえに遠く隔たつてもいる。



こうしたことに対して明示的な答え合わせはなく、ただ日々の連続を描く映像から観客が想像を働かせるのみだ。だからこそふたりの関係性は汲み尽くせない豊かさをもっている。わたし

たちの人生で、記憶のなかで白黒がつくことなどいくらもない。むしろ曖昧で答えのない記憶だからこそ、わたしたちはそれを憶えているのかもしれない。そして記憶に織り込まれた謎の汲み尽くせなさゆえに、わたしたちはそこへ何度も立ち還り、ついつい考えをめぐらせてしまう。ソフィはそうして何度もこの記憶をたどり、ビデオを何度も再生し、父の姿にその謎の答えをみようとしているのだろう。あのとき父は、何を考えていたのだろうか？

そう、この夏はビデオカメラに記録されているのだ。ソフィが父を撮り、父が娘を撮った映像の中にヴァカンスの日々は残っている。大人になったソフィは映像を見返している。父もまた、トルコのホテルで映像を見ていた。ビデオカメラの映像は前述のクロース・アップが多く使用され、断片的にものを映している。そこには映ったものと同時に、映らなかったものもある(観客はそれを見ている)。フレームの外に追いやられてしまったものの、記憶からこぼれたもの、汲み尽くせなかったもの。それは自然と映画全体へと波及してくる。観客が目にするトルコでのヴァカンスの記憶もまたカメラという装置によって撮影されているがゆえに、そこに映っているものがすべてではないという認識があらわれる。記憶が取りこぼしたものを観客は探し始める。あのときわからなかったことを追い求めるソフィのまなざしと、フレームの外のできごとへ意識を向ける観客のまなざしが重なり合う。観客はソフィの記憶の中へ釘付けにされる。

ビデオカメラが記録しているものはもうひとつある。それは撮っているその人自身だ。ソフィがベランダで「へんな動き」をする父を撮った映像には、ソフィのまなざしが色濃く残されている。父がプールで遊ぶ娘を撮るとき、その映像にもっとも強く残るのは父のまなざしである。大人になったソフィは父が幼

い自分を撮った映像を見返しながら、そこに父の姿を見ていたのだろう。じつとカメラを構えて自分を映し続ける父と、大人になった娘がビデオを通して対面する。あのラストシーンには、映像によって時間を超えて記憶と向き合うことができるという希望があふれている。それが映画にできるすべてでなくてなんだろうか。

ラストシーンでソフィの心象イメージの中の父はビデオカメラを降ろすとゆっくりと扉の向こうへ帰っていく。扉の向こうにはレイヴのフラッシュが一瞬光る。あのパーティはソフィの記憶のなかで作り上げられた、父とのつながりの空間なのだろう。トルコでの最後の日、父は嫌がるソフィをよそに踊り始める。ソフィは父に手を取られて一緒に踊り出し、父と抱き合った。あの瞬間に父はソフィのなかで永遠になったのだろう。音楽とダンスとハグの感触が変質して記憶のなかで固着したのがレイヴで、その手触りに時間性はなく、あの空間で父と娘は永遠に踊り続けている。ソフィはいつでもそこに還ってきて、記憶のなかでほんの束の間、父に触れることができる。そうしてまた現在に戻ってくることができる。それが人生のすべてではないだろうか。そうしてわたしたちは生きていくのではないだろうか？

トルコのホテルで父は娘の映像を見返していた。大人になったソフィのまなざしは、あの日の父のまなざしと繋がっている。ふたりはあの夏のビデオカメラを通して、ずっと見つめ合っているのだ。そのまなざしの交換がもたらすあたたかさは、成長したソフィにいつまでも残るだろう。日焼け後のクリームのように、痛みからそっと守るように。



## あとがき

北大映画研究会副部長の根岸建人と申します。

映画研究会の部誌「Ride On」、いかがでしたでしょうか。

今年入った新生も含め、現役部員の力を合わせて作成しました。それぞれが好きな映画を、好きな文章の形で紹介しています。

皆さんのお気に入りの映画を振り返ったり、まだ見ていない新しい映画へとつながるきっかけとなりましたら、部員も喜びます。

映画研究会にとって、対外的に頒布することを想定した部誌製作は、私の知る限り初めての試みとなっています。至らぬ点もあったと思いますが、楽しんで読んでいただけましたら幸いです。

他団体の例にもれず、先のコロナ禍によって北大映画研究会は大きな打撃を受けました。私が入部した 2021 年度は大学の要請により対面活動が停止され、自主映画の制作どころか集まって映画の話をする事すら制限される状態でした。

それから二年がたった 2023 年現在。北大映画研究会はコロナ前の活動を取り戻しつつあります。6 月の北大祭の上映会や今回の部誌発行など、対外的に成果物を発表する機会もいただけるようになりました。

サークル内でもいろいろな変化がありましたが、北大映画研究会はこれからも変わらず、札幌を中心に自主映画の制作と上映あるいは今回のような部誌の発行を通じて表現活動を行っていきたいと思っています。応援の程、よろしく願いいたします。

北大映画研究会副部長  
根岸建人

著者名 北大映画研究会  
発行日 2023年 7月 9日  
印刷 ちょこっと印刷工房